投稿歴は半世紀

【大阪市平野区】自他共に認める〝感動屋さん〟。畑中政子さん（74）＝女性部副本部長＝は、暮らしで起こったこと、出会った一つ一つを、〝素通り〟しない。悲喜こもごもは全てネタ。オチをつけて面白く。「せやないと、誰も読みとうないでしょ」。新聞、ラジオの投稿を始めて、はや半世紀。「自分の人生、切り売りしてますねん（笑）」。快活に、時に染み入るような筆致が持ち味だ。（2月16日付）

書いてなんぼの 泣き笑い人生

畑中さん（手前）の明るさは地域に欠かせない。「下向いてても、何も進みませんやろ」。力ずくで笑わせに走ることも

元々、書くこととは無縁だった。母は脊椎カリエス、父は結核を患い、生活はひっ迫。学ぶ楽しみを感じる余裕はなかった。それが1959年（昭和34年）、創価学会に入会するや、両親は見る見る活力を取り戻す。畑中さんは幼いながらも、信仰の力を感じた。

父の死を機に、親戚のいる宮崎に身を寄せた。定時制高校に通う。働きながら学ぶ高等部員へ宛てた、池田先生の詩を暗唱した。

「苦しき仕事　深夜の勉強／これも修行ぞ　苦は楽し／君が信念　情熱を／仏は　じっとみているぞ」

夏の夜に明かりが浮かぶ教室は、眠気と蚊との戦い。畑中さんが卒業間近につづった一文に担任が涙を浮かべ、卒業生代表に推してくれた。堂々たる答辞。自分なりの言葉が人の心を打つ、初めての経験だった。

集団就職で大阪へ。3畳一間から、毎日のように「嘗がこけたような何でもないことまで」、母への手紙に書いた。給与日には仕送りするために、郵便局へ。清貧を誇りとしながら、その後、憧れの電話交換手に。だが社内でのいじめや大失恋も味わう。女子部（当時）の活動に励みながら、気付けば29歳。結婚願望はなかったが、周囲の勧めもあり、14度のお見合いを重ねていた。

池田先生との出会いは81年3月。関西友好総会で役員を務めていた畑中さんに、池田先生から激励が届いた。第3代会長辞任の2年後。直接、お礼を伝えたいと自転車を走らせた関西文化会館で、池田先生とばったり。はやる思いで感謝を口にすると、先生は「分かったよ」と包み込んでくれた。不安も迷いも吹き飛び、広布の歩みに拍車をかけた。

結婚して2人の息子に恵まれ、当選した団地に、母を呼び寄せた。地区担当員（当時）となり、12階建ての隅々まで対話に歩き倒す毎日。どの家庭にも泣き笑いがあふれていた。畑中さんは、忘れ去られそうな一つ一つをすくい上げるように、メモに書き留めるようになった。

暮らしこそ　ネタの宝庫

毎日コツコツと。たゆみない練磨があって、よどみない文章が紡がれる

飼っていた金魚が大量の卵を産んだ。「こんなんどうするん」と嘆く畑中さんに、次男は「これも大切な命やで」と。〝なんてすてきな子や〟。感動をそのまま一般紙に投稿すると、ごほうびに図書券まで付いてきた。

別の日、チンチン電車に乗った。おじさんからの熱い視線を感じ、〝美人なのも、困りもんやわ〟とお高くとまっていると、電車賃を払わずに降りたおじさんから指をさされた。「うちの母ちゃんから、もろうてや」。後で〝やられた〟と気付き、そんなこんなを笑い話にして八ガキに。いつしか投稿にハマっていた。

難しいことは「よう書きません」。高尚な議論とは無関係。ただ人の優しさ、ぬくもりに筆を走らせた。

自分も相手も上機嫌に

競走馬の厩務員見習で苦労する長男、荒れた次男の〝一人だけ〟の卒業式、夫から初めての花束のプレゼント、焼き鳥の串打ちバイトでの交流……。

平坦ではない、山あり谷ありの人生。夫婦で開いたすし店の廃業。パチンコざんまいの夫との2度の離婚。息子が起こすトラブルの数々。体がやわらかくなるような日々も、ちょっとした喜びを大切にした。「プライバシーになるもあるん」。なんでも書いた。ただ書けなかったこともある。

93年（平成5年）、母が交通事故に遭った。警察から連絡を受けた時はすでに手遅れだった。全身の血の気が引いた。

母ひとり娘ひとり。二人三脚で歩んできた。何げない景色に母の姿を重ねてしまい、布団にふさぎ込んだ。

悲しみに暮れ、人前を避けた。それでも閉ざした心に光を呼ぶ一言があった。「早く出てきてや。寂しいやんか」。自分のことを慕ってくれる同志がいた。悲嘆を抱えたままでいい。人の輪に飛び込んでいこう。人生が一段と味わい深くなった。

言葉は時に刃になる。だからこそ、読んだ後にどんな気持ちになるか。文章の向こう側にいる人に思いをはせた。「愚痴は福運を消し、感謝の唱題は万代の幸を築く」。『香峯子抄』の一節を胸に、題目でアイデアをひねり出す。

「石中の火・木中の花、信じ難けれども、縁に値って出生すればこれを信ず」（新1228・全242）。御書を繰り、美しい言葉を見つけては刻んだ。

聖教新聞の「声」の欄。ある投稿者を目標にした。大阪の女性。さりげない日常と、仏法の眼を感じる書きぶり。トラブルも、みずみずしい決意に転じる潔さに憧れた。ある時、文章の極意を尋ねた。「とにかく書き続けることよ」。掲載されるかどうかは二の次。意に介さなくなった。

午前4時。ベッドの中でストレッチ体操を済ますと、エンジン全開。息子が使っていた勉強机に向かう。日記に始まり、御書、小説『新・人間革命』と静寂のなかで、わが心を耕していく。「祈っていると、オチが頭の上に降ってきますねん」

昼時にはラジオ「テレフォン人生相談」に耳をそばだて、情報収集も抜かりない。

関西弁をこよなく愛し、モットーは〝自分も相手も、上機嫌にすること〟。先日は、団地から施設に入所する友人を、たくさんの仲間で送り出した。施設の職員が「こんなにぎやかな人、初めてや」と目を丸くした。

手元には、半世紀にわたる投稿を張ったアルバムが山ほど。「こんなん、残してもしゃあないねんけど」と笑うが、「これこそ名もなき庶民の生活闘争の証し。「高齢化／まだまだ青い／七〇代」。楽しみはこれからである。